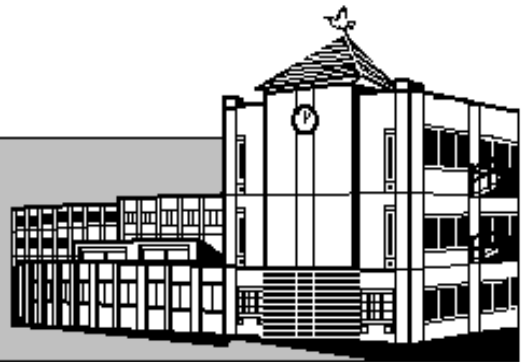


# 図書館だより



2001年度 第1号 (2001年6月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

## 目次

「図書館より公文書館が仕事場」.....	国際文化学科教授 田中利幸 (1)
「大宅壮一文庫」を利用する.....	97K003 荒井太郎 (2)
図書館報告.....	(3)
事務室より.....	図書館長 柴沼晶子 (4)

## 「図書館より公文書館が仕事場」

国際文化学科教授 田中利幸

私の研究専門分野は「戦争犯罪」や「戦争責任」である。とりわけ、アジア太平洋戦争期において発生した様々な戦争犯罪ケースを分析対象としている。こうした研究上の特徴から、私は図書館で過ごす時間よりも、公文書館で資料探索に時間を費やすほうが圧倒的に多い。かつて計算したことはないが、一冊の本を完成させるためには、その原稿執筆のために費やす時間のおそらく数倍を公文書館での資料収集に私は使っているのではないかと推測する。

これまで、オーストラリアでは首都キャンベラにある豪州国立公文書館や戦争博物館資料室、アメリカでは首都ワシントンとメリーランド州に分散している米国公文書館、英国はロンドン郊外リッチモンドにあるパブリック・レコード・オフィス、日本では東京の国立国会図書館内の政治史料室などを私は「仕事場」にしてきた。

資料探索に当たって最も手間がいらぬ公文書館は、オーストラリアのそれである。国の歴史が浅いことや人口が少ないためであろう、所蔵資料の数がそれほど多くない。そのため、ほとんどの資料の検索がコンピューター・データ化されているため、キー・ワードの使い分けや組み合わせを粘りよく続けられ、読みたい資料のタイトルがたいい見つかる。しかし長い歴史を有する英国は、膨大な資

料をパブリック・レコード・オフィスに蓄え込んでいるにもかかわらず、精妙な資料整理技術の伝統があるからであろうか、意外と検索は容易である。

最も資料探索に骨を折らされるのが、米国公文書館である。ハイテク・コンピューターが普及しているアメリカ社会という一般的なイメージがあるため、資料検索は全てデータ化されているだろうと思ったら大間違い。現実とは全く逆で、コンピューター・データ化されている資料はほとんど無い。数年前にメリーランド州カレッジ・パークに新築された分館の地下は、ニューヨーク・スタジアムより大きい収容面積を持つが、ここに集められた気の遠くなるような数の様々な公的資料はそれぞれ小さなダンボール箱に入れられ、ごく大雑把な内容記載が箱に標されているだけである。

ここから自分が欲しい資料を探し当てるのは、「藁の中の針を探す」よりはるかに難しい。したがって、初めてこの公文書館を訪れた研究者は、どうしたらよいのかさっぱり分からず、最初の数日は戸惑うだけである。探索の仕方は色々あるが、自分で見つけださなければ誰も教えてはくれない。毎日毎日、朝から夕方まで机にすわりこんで資料の詰まったダンボール箱を開けて内容をチェックしてみ

も、欲しい資料になかなか行き当たらない。数日連続で無駄に時間を費やすことは、ごく普通である。しかし困難であるからこそ、念願の資料を見つけだした時の喜びは言葉では表現できない。私は宝くじに当たったことがないが、おそらくその時の心境に似ているのではないかと思う。こ

の時の「歓喜」が忘れられなくて、今年もまた夏に、米国公文書館での資料探索に当たる一ヶ月ほどの旅に私は出る予定である。

## 「大宅壮一文庫」を利用する

97K003 荒井 太郎

私が卒業論文を作成するに当って参考文献として利用したものの中に、一般の図書館にはない一味違ったものがあり、これが大いに役に立った。それは、日常生活の中で貴重な情報源となっているにもかかわらず、その大半が廃棄されてしまうのが常である「雑誌」である。それも学術誌や専門誌のように保存されたりすることもない、いわゆる週刊誌や月刊誌のことである。これらはごく身近にありながら普通には論文の参考文献とは考えられていない。しかし簡単には見過ごせないものだと思う。

このような雑誌の類は前記したように、一度読んだらその後は捨てるか、もしくはいつの間にか無くなってしまふという運命が待っている。しかしそんな雑誌を捨てることなく、また数多く発売されるそれらを細かく買い集め、ついには図書館として我々に開放してくれた人がいる。その人こそ、この日本で唯一の雑誌専門図書館「大宅壮一文庫」の設立者、評論家大宅壮一である。彼は様々な種類の雑誌を集め、保管した。いつしかその量は膨大なものとなり、彼の死後、雑誌専門の図書館として広く一般に公開された。

私がなぜ、この大宅壮一文庫を利用したかということ、私の卒業論文の題材が、韓国食文化を代表する「キムチ」であったことが大きく関係している。日本における近年の爆発的なキムチ普及に着目した私は、これをテーマとして取り上げてみると面白いのではないかと考え、早速資料集めを開始した。

当初、キムチの伝統や日本の食品業界におけるその成長について、大学やその他の図書館でそれに関係する文献、資料を見つけることができた。しかし調べていくうちに、それらの図書では得られない情報が必要であると感じ始めた。その得られない情報というのは、なぜこれほどまでにキムチが我々日本人に好まれるようになったかということであった。これを知るためには、一般の図書館に置かれている文献では得ることのできない、いわゆる「流行りものを扱う」という部面での情報が書かれている資料が必要となったのだ。

そんな時、ゼミの担当教員である浅野先生が言われていた、「雑誌の図書館がある」という言葉を思い出した。以前聞いたときに、「利用するかもしれない」と考えていた

こともあり、早速その図書館について調べ始めた。

「大宅壮一文庫」というその図書館は、東京の世田谷にあった。インターネットで場所を調べ、同じ必要を感じていた友人も行きたいということになったので、二人で行くことにした。しかし、ただ闇雲に行ったのでは、膨大な記事の中にある必要な資料を見つけることはできない。そこで、私たちは行く前に、大学の図書館にある『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』で、自分が必要としている記事が載っている雑誌をあらかじめ調べて行くことにした。あとで、現地には10数台のコンピュータが設置され、それによっても調べられることがわかったが、行く前にあらかじめ調べておいた方が、コンピュータを使うにしてもスムーズに検索できるはずだし、また行ってから必要なものがないというのも困るので、利用するに当ってはこのやり方を勧める。

私は「世相 - 食一般」という項目で検索し、10件ほど見つけることができた。そのどれもが非常に興味深く、また雑誌ならではのいい意味でのルーズさや俗っぽい表現が、他の文献では得ることのできない貴重な情報として、論文を書く上で大きな助けとなった。具体的には、キムチに国際規格を設ける動きが発生しているのだが、それについても週刊誌などには、関係業者や様々な人物に意見を求め、鋭い切り口で掲載するなど一風変わった記事が見受けられた。

利用しての感想として比喩的に表現するならば、学校の授業ではなく課外授業などを経験したような感じである。また、何かを調べるということに関しても、選択肢が一つ増え、同時に調べる力がついたと実感している。

詳しい利用方法は、大宅壮一文庫ホームページに掲載されているが、入館には1人500円必要であり、1回の入館で10冊の閲覧が可能となる。それ以上見るためには、再度入館手続きが必要となる。また閲覧したものをコピーしたい場合も1部140円となっており、簡単なものなら手書きで写すべきだと思う。このシステムは我々学生には痛い負担だが、図書館が独立採算で運営されていることを考えれば当然で、むしろ自立した見識と着想で生きた大宅の面目を表わしていると言えよう。

利用者は様々な年代の人から成っており、多くの人々がおの必要の雑誌を閲覧していた。思っていたよりも利用者が多かったのには驚いたが、日本で唯一の雑誌専門の図書館がいかにも利用価値の高いものかを感じとれた。卒業論文やその他調べたいことがあったとき、この大宅壮一文庫も視野に入れてみたらどうだろうか。他では探せない、あっと驚くような発見があるかもしれない。個人的には、今後社会へ出てからも、この雑誌の図書館から新たな発見をしてみたいと思っている。

それにしても、1970年にこの世を去った大宅は、自分の遺したこの雑誌の山が、これだけ多くの人に有効に使われることをどれだけ想像できただろうか。当初はおそらく、簡単な索引システムであっただろうが、今日「宝の山」に眠る多くの「ゴミ記事」を思うままに引っ張り出せるようになったのは、まったくコンピュータによる検索技術であらう。

大宅壮一について一言：

彼は学生時代、ロシア革命後の革新的な風潮のなかで生まれた「新人会」(創立1918年)に加入し、社会運動にも参加した人である。しかし彼は、おおかたの革新的知識人がまず特定の理論に立って考え、ものを判断するのに対して、社会で起こっている事象がなぜ生じたかを事実に基づいて判断しようとした。それだけに、社会のあらゆる出来事に猛烈な好奇心をもった。週刊誌をとっておこうという考えは、それが社会事象の一番のナマの資料(素材)であるというところにあった。彼は世相を鋭く読みとって、例えばテレビが普及し「俗悪番組」が氾濫する戦後の日本社会を「一億総白痴化」という警抜なことばで皮肉ったりした。

(以上は浅野先生からお聞きしたお話をもとにした。)

## 図書館報告

### 2000年度図書貸出ベスト15

1	開発と環境の経済学	鳥飼行博	東海大学出版
2	シェイクスピア全集 お気に召すまま	小田島雄志 訳	白水社
3	アメリカ文学史 植民地文学からポストモダンまで	別府恵子 他編著	ミネルヴァ書房
4	環境経済学	植田和弘	岩波書店
5	聖母マリアの系譜	内藤道雄	八坂書房
6	留学	遠藤周作	新潮社
7	鹿鳴館の貴婦人大山捨松	久野明子	中央公論社
8	聖母マリアの謎	石井美樹子	白水社
9	シェイクスピア全集 オセロー	小田島雄志 訳	白水社
10	解説国際人権規約	宮崎繁樹 編著	日本評論社
11	国連とPKO	福田菊	東信堂
12	法の中の子どもたち	後藤弘子	有斐閣
13	人権、国家、文明	大沼保昭	筑摩書房
14	聖母マリア	竹下節子	講談社
15	「文明論之概略」を読む 上	丸山真男	岩波書店

## 蔵書数

(2001年3月31日現在)

区分	和書	洋書	合計
図書資料	33,807	12,191	45,998
逐次刊行物(種)	106	86	192
視聴覚資料	240	202	442

## 事務室より

図書館長 柴沼晶子

新緑の間を縫って薫風が図書館の窓辺を吹き抜けていきます。いよいよ授業も前期の山場にさしかかり図書館で学業に専念する学生の姿がみうけられます。

2001年度の第1号「図書館だより」には田中利幸先生が図書館よりも公文書館に通って研究を積み重ねられたご体験を綴ってくださいました。世界各国の公文書館が身近に感じられ、資料の山に埋もれて研究の想を練り、宝を発見する研究の醍醐味を追体験させていただくようです。

卒論でキムチを取り上げるために資料としての雑誌に目をつけ、大宅壮一文庫を利用した荒井さんがその体験を紹介してくださいました。キムチという身近な素材を取り上げて問題を設定し、問題意識を論文に纏めていくアプローチの仕方は、これから卒論に取り組もうとしている後輩により刺激となることでしょう。

丁度この図書館だよりを書いている時に、本学名誉教授の伊藤豊治先生が翻訳されたウィリアム・ゴールディングの『通過儀礼』を図書館にご寄贈くださいました。ノーベル賞作家の最高傑作といわれるこの作品を先生はゼミで学生に指導されましたし、先生の最終講義でも取り上げられ、大教室に溢れる聴衆に感動を与えられた名講義をあらためて思い起こします。英国文学最高の賞であるブッカ賞に輝く作品の本邦初訳ですので、是非学生のみなさんもお読みください。

開かれた図書館を目指して当館の蔵書検索システムができました。敬和学園大学のホームページへアクセスしてください。開学以後10年の蔵書の増加は左表の通りです。今後もさらなる図書の充実を目指したいと思います。購入希望図書をお寄せください。

学生の利用のために基礎ゼミの開講時に図書利用の説明をいたしました。お役に立ちましたでしょうか。ご意見やご要望があれば承りたく、ご自由にお申し越し下さい。

